

## ACS 症例における distal protection device 使用の検討

はじめに、No reflow が考えられる病変として・ACS などに多いと思われる血栓性病変、・IVUS において positive remodeling を呈し、プラーク量が多い病変・ある程度の距離や角度で attenuation を伴う病変・lipid poor like を呈する病変・SVG グラフト病変などが考えられる。その中でも、特に注意される病変には ACS 症例が多いと考える。しかし、実際に当院での ACS 症例で、上記のような病変を呈した症例で問題となったケースは少ない。当院では、ルーチンでステント留置前後にニコランジル 2mg を冠動脈内投与し、また必要であれば、ニトロプルシッドを 50 $\mu$ g 投与している。では、distal protection device はいつ使われているのだろうか？答えは、症例数の割にはほとんど使用されていない。なぜ、使用されていないのだろうか？考えられる理由としては、心筋梗塞サイズの縮小が期待されたが結果として梗塞サイズの縮小が認められなかった報告があることや死亡、心血管イベントの抑制も認められなかった報告などがあることが考えられた。また、ワイヤー操作が悪く、病変によっては不通過症例も認められ、前拡張が必要な症例も存在することも理由として考えられた。今回、当院での症例においてイメージングモダリティを用いて提示し、どういう病変で No reflow が起こり、また、同じような病変でも No reflow が生じなかった病変とを比較・検討し発表する。

評価1	評価2	評価3	採否
発表日時 月 日 (第 日)	セッション	会場	時 分～ 時 分

受付番号

演題番号